

**社会科学における計量分析を再考する：
重回帰分析やSEMはいったい何を“説明”してきたのだろうか？**

時間	セッションタイトル	スピーカー（所属）
11:00	主催者（を代表して）挨拶	村澤昌崇（広島大学）
第0部		
11:05	予習セミナー「はじめてのバックドア基準：重回帰分析における偏回帰係数の意味を理解するために」	林岳彦（国立環境研究所）（35～40分＋質疑応答込みで最大1時間程度）
概要	重回帰分析を使った“説明”を考える為の事前学習	
第1部		
13:20	趣旨説明「回帰モデルと説明・予測・因果」	中尾走（愛媛大学）、林岳彦（国立環境研究所）（10分程度）
概要	研究会の趣旨説明	
13:30	「そもそも、“説明”とは何か？：科学哲学の観点から（仮）」	井頭昌彦（一橋大学）清水雄也（京都大学）（質疑応答込みで最大1時間程度）
概要	科学／社会科学における“説明”概念、およびその正当化についての科学哲学の観点からの解説と論点整理	
休憩（10分程度）		
14:40	「心理学における重回帰分析、統計モデリング、因子分析から計量的な“説明”を考える（仮）」	清水裕士（関西学院大学）（30分）
概要	心理学では、重回帰分析、統計モデリング、因子分析を用いて何かを“説明”したと見做してきた一方で、その論拠は納得度に依っていたのではないかと（ https://osf.io/bpws2 ）。それでは、何によって私たちはその計量的“説明”に説得され、納得してきたのか？“説明”としての回帰モデルに活路を見出すことは可能なのか？などを考える。	
15:10	「計量社会学におけるモデルと説明」	筒井淳也（立命館大学）（30分）
概要	計量社会学では、他の分野と比べて因果推論モデルの導入が遅れている、あるいは積極的に利用しない（できない）という状況が見られた。理由の一つは、「社会階層の再生産」「同類婚傾向の変化」といったテーマを扱う計量社会学が、基本的に自己選択（調査観察）データに近似するモデルの確定をもって「説明」としてきたことにある。研究会では、学歴や結婚といった、処置として考えることが難しい要因については、自己選択の否定を目標のひとつとする因果推論モデルではなく、自己選択の結果の解釈こそが説明になりうるのではないかと、ということ論じる。	
15:40	「プロキシを通して計量的“説明”を考える（仮）」	樊怡舟（広島大学）、中尾走（愛媛大学）（20分）
概要	SES、学力、イデオロギーなど、社会科学の理論の多くは、決して完璧には測定できない構成概念から構築されている。計量分析をする際に、あくまでそれらの構成概念の代理として、代理指標を用いて、構成概念間の関連を間接的に“説明”しているに過ぎない。それでは、プロキシを利用した重回帰分析の結果はいかに解釈されるべきだろうか。そして、プロキシ間の関連性を下地に、いかなる社会科学的「説明」が可能なのか、を考える。	
16:00	「ディスカッション」	ファシリテーター：林岳彦（国立環境研究所）（最大30分程度）
概要	全セッションを通じた総合的なディスカッション	